

# 2018 いまだ逍遥途上にて

物部俊之

## うろと暮らすということ

---

古い樹木には「うろ」ができる。

樹洞と書けらしい、中が腐ってぽっかりと開いた穴だ。

さて、不惑の歳もずいぶんを終え、私の内部にも「うろ」が大きく成長しつつある。

今まで何をしてきたろう。つまりはこれから何をしたいかという気分よりも、残り時間の減少に伴い、お前は何をどうして来たのだという焦りが見上げるほど、大きくなってしまふ、これが「うろ」の主たる構成要素なのだろう、天地逆転して私の中の「うろ」が私を飲み込もうとするのだ。

多分、私の他にもこんな気分の人たちが多くであろう。

「うろ」を樹木の洞と言うならば、供え物でも線香でも焚き、それでも、どうしようもないのであれば、とにかく手当たり次第に辺りのモノを詰め込んで、「うろ」の存在を無くしてしまおうと画策するのだが、どうもこの「うろ」は食虫植物の遺伝子でも取り込んでいるらしく、いくら埋めてしまおうとしても、気に入らないモノは消化してしまうようだ。

結局のところ、「うろ」とうまく付き合っていく他ないらしい。

そう思い、頭突っ込んでのぞいてみれば、

案外、含蓄のある文様である。

また、樹液の溜まりが昆虫達の餌となり、なんとなれば、小鳥や小動物の避難場所にもなっているようである。

「うろ」とは案外気持ちのよい、人好みな輩なのかもしれない。

どうせ、死ぬまでつきあっていくのは違いないことであろうし、ならば、うまくやっていたらいいなと年頭に思う。